

# ほのか診察室

HONOKA Consultation room

シリーズ

第74話

## 膵臓がんを知ろう



市民病院 消化器科  
外科診療部長

横井 佳博  
監修

**膵** 臓は長さ15cm、幅3〜5cmの細長い臓器で、胃のちょうど裏側に存在します。膵臓には二つの大きな働きがあり、消化酵素であるアミラーゼやリパーゼ、トリプシノーゲンを含む膵液の産生によって、

十二指腸と小腸で行われる食物の消化、吸収（外分泌作用）と、インスリンやグルカゴンといったホルモンの産生（内分泌作用）を担っています。通常「膵臓がん」とよばれるものは、膵液が運ばれる「膵管上皮」

由来が80〜90%とされています。膵臓がんの症状は、「食欲不振」「全身の倦怠感」「腹痛・腰痛・背部痛」「黄疸」などが挙げられますが、いずれも膵臓がん独特のものではなく、ほかの疾患が原因でも起こり得るものばかりです。しかもそれぞれ個人差があり、必ずこうした症状がでるとは限りません。さらに初期には特有な症状がほとんどなく、体調の変化に気づいて診断を受けた時点で、もはや手術を受けることができない状態にまで進んでいるということが過半数です。最近の調査では人口10万人あたりの罹患率はほぼ10人に達していて、年々増加傾向にあります。日本では、男性にやや多く、年代別の罹患率をみると、男女ともに40歳代から徐々に増え出し、50歳代から急増傾向にあり、高齢になるほど上昇しています。

近年、生活習慣の変化とともに糖尿病や慢性膵炎が増えています。これらの病気は膵臓がんに関連します。糖尿病や慢性膵炎の診断がなされた場合は、膵臓がんの検査を受けることが勧められています。また、過度の飲酒や強いストレス、不規則な生活、肥満も膵臓がんの発症リスクとなります。近親者に膵臓がんの人がいるかどうか（家族歴）、喫煙も重要です。膵臓は周辺臓器の奥にあるため、一般的な検査では見つけにくい傾向にあります。そのため膵臓がんは早期発見が難しく、患者さんの多くは進行した状態で見つかったのが現状です。がんは一般的に、大きくなると転移が起りやすくなりますが、膵臓がんは、早いうちから浸潤、遠隔転移しやすいことも理由の一つです。最近では、超音波検査や内視鏡検査、ヘリカルCT、MRIなど、検査技術の進歩により、診断技術が向上しています。それでも、早期の膵臓がんは、発見するのが難しいがんです。診断には、内視鏡と超音波を併用した超音波内視鏡により、早期膵臓がんを発見します。治療はほかのがん同様、外科手術、抗がん剤治療、放射線治療です。

膵臓がんの治療は早期発見が重要です。健診を受け、糖尿病や慢性膵炎と診断された方、また膵臓の異常を指摘された方は、早めに医療機関へ相談してください。